

古典講読入門への招待

一橋大学では、2017年度より「古典講読入門」という名称の科目群を設置します。これまでに読み継がれてきた「古典」を手がかりに、今に通じる普遍的な問題を考えてみましょう。2017年度には、以下のような科目が開講されます。それぞれの科目についての詳しい説明は、シラバスで確認してください。なお、この一覧に掲載されていない科目もあります。

(表の見方)

担当教員名	学期	曜日と時限
内容紹介		

哲学・思想

中井 亜佐子	秋	月2+木2
与謝野晶子とヴァージニア・ウルフの代表的な評論を読む。同じ時代を異なる国と文化の下に生きた二人の女性作家が、それぞれに女性の教育、職業、政治参加についてめぐらせた思考の軌跡を辿りたい。		
小関 武史	秋冬	木2
ヴォルテール『寛容論』を読む。宗教的対立が生んだ冤罪事件を背景とする本書は、「思想・信条において立場の異なる人との相互理解は可能か」という問題を考えるヒントになるだろう。		

文学

井川 ちとせ	春夏	火4
現代英国を代表する作家マーガレット・ドラブルによるフェミニズム小説の古典 <i>Millstone</i> (1965) を読む。シングル・マザーとなる主人公の経験を通じて、近代主義的な自律の意味を問いたい。		
中野 知律	秋冬	金3
サント=ブーヴの批評文「古典とは何か」(1850年)を邦訳で精読する。「古典」の定義をめぐる古典的議論を検証する試みとなる。		
鈴木 将久	春夏	木4
竹内好『日本とアジア』を読む。竹内好は、中国文学をいかに理解するかを考えぬき、そこから日本の問題に切り込み、日本において中国に向き合う姿勢を問い直した。この授業では彼の思考を多面的に読み込む。		
松原 真	秋冬	木4
夏目漱石の文学作品を読み、議論します。本年度の作品は『坊っちゃん』の予定です。		
柏崎 順子	春	火4+金4
江戸時代の文学を読む。近代直前の文学を読むことで日本がどのような人間観を醸成させてきたかを考えるよすがとする。		

人間科学

小岩 信治	秋冬	木1
ベートーヴェン(1770-1827)の音楽を聴きつつ、彼の音楽が「クラシック」(=古典)になる過程で生まれた文章を読みます(ロラン(1866-1944)の『ベートーヴェンの生涯』(1903)ほか)。		
武村 知子	春夏	水2
近代ドイツ文学の金字塔、ゲーテ『ファウスト』を柴田翔訳の日本語で読む。西欧人文主義のひとつの帰結としてこの壮大な戯曲を読解しながら、実際の上演を想定した台本化を試み、現代文化との接続をはかる。		